

I [企画] 演じられる性

報告 2 : 田村 容子 (金城学院大学)

「救国の妓女」を描く中国映画——社会主義文化における女性の身体と国家の想像

中国における「妓」とは、本来は歌舞音曲を生業とする女性を指すが、宴席のみならず、ときに枕席にも侍ったことから、その含意は広がっていった。妓女は中国の文芸において特別な位置を占めており、とりわけ知識人男性と彼らの相手をつとめる名妓とのあいだの交情は、詩や小説、戯曲に繰り返し描かれた。晩唐の詩人杜牧の「秦淮に泊す」では、酒色にふけり国を滅ぼした陳後主と、彼の作った曲をうたい興じる妓女との対比が用いられており、「商女は知らず亡国の恨み」の一句は、国家の存亡と妓女を対置する叙事のひとつの典型となった。この句は後世においてもしばしば引用され、やがて「亡国」のイメージを反転させた存在としての、「救国の妓女」という像が作り出された。

20 世紀以降の中国においては、まず日中戦争期に、国難に際して救国や抵抗の行動をとった明清時代の名妓の物語が相次いで語りなおされるという現象が起きた。社会主義国家となった中華人民共和国初期においては、妓女を描くことが忌避され、「救国の妓女」の空白期となるが、女性の身体と国家にまつわる想像は、「戦闘する女性」に形を変えて叙述された。その後、21 世紀以降の戦争映画において、「救国の妓女」はふたたび召還され、女性の身体と国家のアイデンティティについて、新たな表象が生み出されている。

本報告では、主として 20 世紀中国の映画に描かれる「救国の妓女」に着目し、父権と国家のイデオロギーに対置させられる女性の身体というイメージの変容を概観する。女性の性的な身体が国家の存亡と結びつけて語られる事例を考察の対象とするため、妓女のほかに、慰安婦や女スパイ、女性兵士の表象についても言及する。中華人民共和国の初期から現在にかけての女性の身体と国家にまつわる想像を、社会主義文化との関連から読み解き、その特徴について論じていく。